

『古今和歌集両度聞書』と『古今和歌集遠鏡』

—『古今和歌集』第六十八首の解釈をめぐって—

小 高 道 子

契沖・賀茂真淵の学統を継承した本居宣長は、古今伝受を継承する中世歌学を批判した。『排蘆小船』では「古今伝授大いに歌道のさまざまに於て、此道の大厄也」とまで記し、古今伝受批判をしている。こうして古今伝受を批判する宣長の視点は宣長研究者にも継承された。田中康二氏は、『古今集』の研究は、契沖『古今余材抄』の出現によってはじめて文献実証主義を獲得したと^①された。

それでは「古今伝授を伴った堂上歌人の注釈」は、「文献実証研究」とは無縁のものであったのであろうか。本稿では『古今和歌集』第六十八首の解釈について、東常縁の講釈を宗祇が聞書した『古今和歌集両度聞書』と宣長が「俗語訳」をした『古今和歌集遠鏡』との解釈を比較検討してみた。

—『古今和歌集遠鏡』の「俗語訳」

田中康二氏は、『古今集』の研究は、契沖『古今余材抄』の出現によって「伝統の呪縛から解放され、用例主義・文献実証研究という科学的方法を獲得した」とされた^①。そして「現代の学術用語で言えば、文献実証主義ということになる」「現代では当然とされる証拠立てという手続きは、実は契沖から始まった」とされた。

近世における『古今集』の研究は、古今伝授を伴った堂上歌人の注釈を全面的に批判する契沖『古今余材抄』の出現を持って新たな段階を迎えた。当該書が登場したことによって、『古今集』の研究は伝統の呪縛から解放され、用例主義・文献実証研究という科学的方法を獲得したのである。

宣長は契沖とそれ以外の説との違いを「証拠」の有無に求めていく。「証拠」とは何か。それは語義や文脈を解釈する際に根拠とする言説のことである。契沖説にはそれがあり、他の説にはそれがない、と宣長は述べている。現代では当然とされる証拠立てという手続きは、実は契沖から始まったのである。(中略)現代の学術用語で言えば、文献実証主義ということになる。

そもそも文献による証拠立てといった研究法は、契沖以前の研究者はほとんど意識さえしていなかった。それはなぜか。文献よりも重要なものがあつたからである。

文献よりも重要なものとは、端的に言えば「古今伝授」である。

このように古今伝授をはじめとする契沖以前の古典学を批判した田中氏は、『古今和歌集遠鏡』の「俗語訳」について「その行為自体が歌に対する理解を深め、歌という物に対する認識を新たにするもの」である」とされた。

訳すという行為は単なる初学者への便宜ではなかった。その行為自体が歌に対する理解を深め、歌という物に対する認識を新たにするものなのである。

二 『古今和歌集遠鏡』と『古今和歌集両度聞書』の注釈について

それでは文献実証主義により「その行為自体が歌に対する理解を深め、歌という物に対する認識を新たに」した宣長の口語訳と、古今伝受により宗祇に継承された解釈とはどのようにことなっていたのであろうか。『古今和歌集』第六十八首の和歌の解釈を比較してみたい。

『古今和歌集遠鏡』

来て見る人もない山里の桜花は よそほかの花がみんな散てしま
うて後にさ さかうことぢやに 今はどこにでも澤山に花はある
ぢやによつて それで遠い山里などへは誰も見にくる人もない
ぢやが

ほかの所の花がもう無いじぶんになってから咲たら いやとも遠
い所でも見にくるであらうわさ

『古今和歌集両度聞書』

桜に対していひをしふるやうの心也。すこし述懐の心あるべし。
五句の外に心ある躰これら尤本たるべし。

『古今和歌集両度聞書』は、全文訳はしていない。しかしながら、『古今和歌集遠鏡』にも『古今和歌集』の本文にもない「桜に対していひをしふるやうの心」があると記している。この「五句の外に心ある躰」

を知る事が、古今伝受における秘伝であった。

『古今和歌集』六八第六十八首の和歌には「見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし」とあり、「桜に対していひ」をふる（やうの心）」という語は見られない。しかしながら『源氏物語』花宴巻に「外の散りなむとやをしへられたりけん」と記されていることに着目して、『花鳥余情』は「花にいひをしへたる心」と注記している。

「外の散りなむとやをしへられたりけん」について『岷江入楚』は『花鳥余情』を引用して次のように記す。

花 古今哥に外の散りなん後そさかましとよめるは花にいひをしへたる心なれば哥の詞になき事をも心をとりにてかくのことくかける也 定家卿の哥はおほくは此物語より出たりとみえ侍り いこま山いさむる花にみる雲のうきて思ひのたゆる日もなし とよめるは本哥の雲なくしそといへるは雲をいさめたる心なればやかつて心をとりにていさむる花とよみ侍る也 この詞に相似たるやうなればよりもつかぬ事なれと筆の次に申侍る也 大かた源氏などを見するは哥などによまむ為也 よまむにとりては本哥本説を用へきやうをしらすしてはいか、と思ひ給へ侍れはいとさなき人の為にしるしつけ侍る也

『花鳥余情』は、『源氏物語』が『古今和歌集』の和歌の心をとって、

『古今和歌集』の和歌の言葉には見られない「花にいひをしへたる心」と記したという。そして、『源氏物語』を読むのは和歌を詠むためであり、和歌を詠む時に「本哥本説を用へきやうをしらせるために、この事を記したという。この『花鳥余情』の解釈は、三条西家においても継承された。三条西実枝を示す「箋」、三条西公条説を示す「秘」ともに、この『花鳥余情』の説を継承している。

箋曰 みる人もなき山里の桜はな外の散りなむ後そさかまし後そさかましといふは花にいひ教たると云義にてをさへて書也 定家卿い駒山いさむる峯に——雲なくしそと云はいさめたる心なれば如此用る也 此哥の取やう外のちりなんの引哥を手本と取やう也 已上花 已上箋

秘 面白き書様也 古今の本哥に後そさかましをしへたるをもて書たる詞也 花鳥にみえたり 弄同

三 師説の継承

宣長は『排蘆小船』で「古今伝授大いに歌道のさまたげにて、此道の大厄也」と述べ、道統を守る古今伝受のあり方を批判している。

かの逍遥院よりして、此の古今伝受を歌道の血脈として、上下ともに天下挙つてこれを尊信し、逍遥院を中興開山と仰ぎてこの道のことは万事この教に従ひ、その説をよくてもあしくても、誤あ

りても改むることなく、一すぢにこれを尊み用ひることになり、其の伝受の家定まりて、他家には名人ありても用ひぬやうになれり。されば世の人挙つて此の一流に帰し、遣違院以来の家の名人は、定家・家隆にもまさりて此の道大きにさかんにして、歌も此の上なくすぐれたることのやうに思へり。これ愚昧の至り、いふに足らぬことなり。

それでは、古今伝受を継承する歌人達は、師説をそのまま継承したのであろうか。次に三条西実枝から古今伝受を受けた細川幽齋の聞書である『伝心抄』と、細川幽齋が智仁親王に『古今和歌集』の講釈をした『古今和歌集聞書』の該当部分をあげる。⁽²⁾

『伝心抄』

五句三十一字ニ心カアマリタル哥也ソコニ述懐ノ心カアル也余所ノ花力散タラハ此山里ノ花ヲモ問ふヘキノ心也(六八首)

『古今和歌集聞書』

そこにハ述懐の心也よその花ちりなん後そかさまし山里の花をもみる人あらんほとに外よりもそくさけと也(中略)源氏にも此心をとりにて外のちりなん後とそをしへられけるとある也

『花鳥余情』にある「花にいひをしへたる心」について、三条西実枝は中院通勝には語っている(『岷江入楚』)が、幽齋には伝えていない。しかしながら、幽齋は『源氏物語』には、和歌の心をとって「外のちりなん後とそをしへられけるとある」ことを智仁親王に講釈している。古今伝受における講釈は、継承した師説の中から、取捨選択して門弟に相伝していたことがわかる。宣長が言うように「誤ありても改むることなく、一すぢにこれを尊み用ひる」事は決してなかった。古今伝受を批判する際には、古今伝受として一括するのではなく、それぞれの古今伝受について論じることが必要であろう。

注

(1) 田中康二氏『本居宣長の思考法』(二〇〇五年 ぺりかん社)。なお、田中氏の引用は同書による。

(2) 細川幽齋から智仁親王への古今伝受については「細川幽齋の古今伝受」(『国語と国文学』一九八〇年八月号)で検討を加えた。また『伝心抄』の引用は「古今集古注釈書集成」、『古今和歌集聞書』は「図書寮叢刊古今伝受資料1」による。なお同書に「序」とあるのは「題号の事」などとすべきであろう。